



UNU-IAS / Kumamoto University
The Second Joint Workshop
on Finding Future Visions of our World:
A Sustainable Japan and the World
Dialogue Methodology for Social Change
for A Sustainable Future

持続可能な未来に向けた社会変革の対話技法

6-8 May, 2015; at UNU-IAS, Japan; <http://www.ias.unu.edu>

日本語による抄録集

K-1. プレゼンテーション・タイトル

[コミュニティビルディングと若者のエンパワメントと平和のためのバイオエシックス]

名前：ダリル・メイサー

所属：AUSN

職位：プロヴオスト

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 [レビュー]

要約・概要

平和の定義は多様である。このワークショップでは、平和および平和構築に関してその理論的・実践的分析を行っていく。平和構築そして紛争解決については多様な理論があり、更に平和構築や紛争解決という名前は使われていないが、それに類似したコミュニティー活動の例は多く存在している。

2010年より Eubios 倫理研究所は、American University of Sovereign Nations (AUSN)、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）、広島平和文化財団、その他の機関・団体との協力のもと、50の国や地域から600人の若者に対して Youth Peace Ambassador Training Workshops（若者平和大使トレーニングワークショップ）を開催してきた。ワークショップでは、参加者達は協力して平和の文化を促進のための課題発見を行った。これまでのところ、参加した若者たちはそれぞれのコミュニティーにおいて平和の文化を促進するために、250もの行動プロジェクトを開発・展開させてきた。参加者は、あらゆる宗教的バックグラウンドと幅広い関心を持つ層からあり、平和へのマルチ・ディシプリナリー（多分野）的アプローチを提供した。

こうした平和のための能力育成事業に関する近年の開発の一つとして、AUSNにおけるコミュニティーと平和大学院修了証明書プログラムがある。このプログラムの任務は、地域の全てのグループ間の平和的な関係の構築そして災害後の地域再建のために地域団結の促進である。同プログラムは、地球上全ての地域の生活の質的向上に従事している大学院生たちに、大学院レベルに不可欠な教育、知識、スキル、研究機会、社会奉仕機会、創造的・分析的批判思考力、そしてリーダーシップ力などを提供することで、参加者全ての倫理的思考力を育成するように設計されている。同プログラムは、多様な地域に応用可能な異文化間の生命倫理学習とグローバルリーダーシップに従事したい人、倫理的な公共政策とその実践に従事したい人、そして環境保全と地球上全ての人々の公共の福祉に従事したい人にとっての学びの選択肢の一つとしてのプログラムである。

地域、災害復旧、そして平和は、疾病予防・疾病管理、様々な集団内の心身の健康促進と、集団間の健全な関係の促進、そして全ての人々の地域サービスの利用促進など、様々な課題が絡んでくる複雑な分野で本質的に集学的であり、それらに対応すべく同プログラムではプログラム推進に際して、以下のことを重視している：

- ・公衆衛生の公共財および基本的権利としての意識の促進
- ・倫理的意思決定、文化、そして政治思想の多様性の促進
- ・全ての人々に敬意をもって接することと、地域の団結力向上のための異文化理解の促進
- ・優れた研究と真理探究の促進
- ・全ての人と地域の人権・基本的自由・平和・人間としての尊厳と尊重の促進
- ・災害時及び紛争時の全ての人々の人権の促進と保護
- ・世界中の様々なコミュニティー、国民主権国家、そして国連の倫理理念の理解

地球上の先住民たちの文化・伝統・健康・幸福・権利を守ることは急務の課題となっている。紛れもなく、健康と公衆衛生は、持続可能な地域、社会、或は国家の支柱であり、平和にとって明確かつ積極的な役割を担っている。

K-2. プレゼンテーション・タイトル

1-1. プレゼンテーション・タイトル

[文化内外での対話のための取引的フレームワーク]

名前：リチャード・エヴァノフ

所属：青山学院大学

職位：教授

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

本稿では、取引的コミュニケーション (Transactional Communication) の概念を紹介する。この概念を使い、文化内外での相互共有問題を対処するためのフレームワークを展開する。コミュニケーション状況では、2つの基本タイプに分けることができる。個々人の相互作用の結果として、コミュニケーション交換に従事する際に相互作用的コミュニケーションが発生する。例としては、私たちの日々の家族内で他者との相互作用、職場、社会の中などが挙げられる。また、彼らの取引内容の変換方法によっては異なる取引的コミュニケーションが発生する。対話的交換には私たち自身の見解と対話的プロセスにおける重要な評価に他人の意見の両方を施すために望ましい点が含まれる。私たちが変わるためには他の人の意見によって形質転換するような対話的交換が必要である。

難治性の不協和は通常、論争の一方側や他方側が非常に独自の視点で見ているか、他人から学ぶことを望まない場合に発生する。しかし、取引的コミュニケーションに従事する過程で、文化内外において我々自身と著しく異なっている場合でさえより良い視点に立つ事は可能である。批判的に両側の状況を考えることで、各位置での正および負であるものを認識し、そして思考と演技の全く新しい方法の出現につながる方法で、肯定的な側面を組み合わせることが可能であることが多い。これを論争に適用された場合、結果は統合的な契約であること、またはすべての利点を最大状況で、Win-Win の関係になることができる。参加者間の力関係は、多くの場合、プロセスとコミュニケーションの交流の成果の両方に影響を与えるので、本稿では審議民主主義の文化内外の対話を行うための適切な制度的状況についても議論する。

1-2. プレゼンテーション・タイトル

[持続可能な未来に向けた社会変革の対話技法の一つとしての情報システムの開発に向けて：
ウェブサイト上でのプロジェクトマネジメント・システムの提案]

名前：上島 佳代

所属：独立研究者

職位：独立研究者

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

1) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言

要約・概要

日常的な対話を基礎とする様々な共同作業を通じた社会的変革を推進するために、ウェブサイト上でのプロジェクトマネジメントのための情報システムの開発が必要である。そこで、ウェブサイト上でのプロジェクトマネジメント・システムを Free Think -Tank (FTT) system として提案する。ウェブサイト上でのプロジェクトマネジメント・システムの設計のために、各種のウェブ・アプリケーション・システムやサイト開発のための無料公開資源のコンテンツマネジメントシステム(CMS)である Plone を活用した。尚、Plone はセキュリティシステムを搭載していない。そのため、ウェブサイト上でのプロジェクトマネジメント・システムの通信暗号化のために、FTTシステムの中に、ユーザーのニーズに応じた通信暗号化システムの設定が必要になる。FTT システムと Plone を組み合わせることで、誰もが様々なプロジェクトを運営するための専用のシンクタンクをウェブサイト上に自由に構築できる。

1. ユーザーのニーズに応じて、ユーザーがウェブサイト上で様々なプロジェクトを自由に運営できる情報システムの必要性

- ・小規模プロジェクトから大規模プロジェクトにいたるプロジェクトマネジメントのために
- ・地方プロジェクトからグローバルプロジェクトにいたるプロジェクトマネジメントのために
- ・閉鎖型システムから開放型システムにいたるプロジェクトマネジメントのために
- ・一言語から多言語にいたるプロジェクトマネジメントのために

2. ウェブサイト上でのプロジェクトマネジメント・システムとしての FTT システムの優位性

- ・低コスト:ウェブサイト上でプロジェクトマネジメント・システムを活用することで、組織管理、情報整理、情報格納、情報共有、情報公開のための費用削減
- ・利便性:ウェブサイトへのアクセスによって、ユーザーはいつでもどこでも、プロジェクトに参加可能
- ・高度な安全性:プライベートに管理されたサーバーのもとで、ウェブサイト上での暗号化された通信プロジェクトマネジメントのためのサイト管理人及び各作業グループのマネージャーは、各作業グループのメンバーがアクセスして活用できる情報と機能を制御できる。

3. ウェブサイト上でのプロジェクトマネジメント・システムとしての FTT システムの特徴

- ・閉鎖型システム(例:ウェブサイト上でプロジェクト内の情報を完全非開示)
- ・半閉鎖型システム(例:ウェブサイト上でプロジェクト内の情報を段階的に開示)
- ・公開型システム(例:ウェブサイト上でプロジェクト内の情報を完全開示)

4. プロジェクトマネジメントのために、ユーザーが操作できる機能

1)組織管理機能, 2)情報整理機能, 3)閲覧機能, 4)共同執筆機能, 5)情報格納機能, 6)情報共有機能, 7)情報公表機能

5. ウェブサイト上でのプロジェクトマネジメント・システムとしての FTT システムのデモンストレーション

CMSとしてのPloneは多言語を供給できる。FTTシステムとPloneの組み合わせで、多言語によるマネジメントシステムを次のようにデモンストレーションする。

1) FTTシステムの英語版サイト:<http://free-thinktank.org/>

- ・基本的なモデルとしての「Project 1」と「Project 2」
- ・グローバルなプロジェクトマネジメントのための大規模モデルとしての「Ethical management system」

2) FTTシステムの日本語版サイト:<http://free-thinktank.jp/>

- ・プライベートなプロジェクトマネジメントモデルとしての「北野ラボ」
- ・地方公共政策についての小規模な研究プロジェクトマネジメントモデルとしての「神戸の震災と神戸市政」

ウェブサイト上でのプロジェクトマネジメント・システムとしてのFTTシステムと、無料の公開型CMSとしてのPloneを組み合わせることで、ユーザーは、プロジェクトの規模、目的と言語に応じた各種プロジェクトをウェブサイト上で開始できる。ユーザーは、ウェブサイト上にFTTサイトのドメイン名と異なるURLとサイト名を作成できる。

1-4. プレゼンテーション・タイトル

[仏教哲学と持続的世界]

名前：田辺 寿一郎

所属：熊本大学

職位：助教

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 [哲学と心理学]

要約・概要

本プレゼンテーションは、持続的世界の模索と実現における仏教哲学の貢献について考察する。創始者である仏陀以来、仏教はどのようにして人間の心が我々の直面している問題の根本的原因になるのか、そしてそれをどう克服するかというテーマを深めてきた。本プレゼンテーションは、この仏教の人間の心の深い分析が持続的世界の構築にどう応用できるかを模索していく。

第一部では、仏教哲学の基礎的思想、特に仏教哲学の根幹である四諦を分析する。第二部では、仏教の暴力論を考察する。第二部のメインポイントは、「条件づけられた心」という概念の提唱とその様々な暴力へのインパクトの分析である。社会的・文化的価値観、規範、思考などに形作られる我々の心がどう我々を様々な形の暴力へと駆り立て、自分とは異なる思想やアイデンティティを有する個人や集団との対話を拒否するのかを考察する。

第三部では、仏教哲学が様々な暴力を我々が克服し、持続的世界の構築が出来るかを模索する。最初に、自己の心の動きを見つめるマインドフルネスの意義とその他者との対話促進へのインパクトを分析する。仏教哲学の視点から見ると、持続的世界の達成には、黙想の実践・認識の変容・他者の苦しみと幸せを自己のものとして感じることの愛情心という我々の心の多機能を重層的に発露させ日常レベルから実践することが重要である。

1-3. プレゼンテーション・タイトル

[ランクの自覚による持続可能な平和づくり：プロセスワークのアプローチ]

名前：岩田 好司

所属：久留米大学外国語教育研究所

職位：教授

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

プロセスワーク（プロセス指向心理学）は持続可能な平和実現のために独特のアプローチを提供している。本発表はその独自性をプロセスワークのランク理論に焦点をあてることによって明らかにすることを目的とする。参加者はランク理論の基礎（定義、特性、種類、シグナル、ダブルシグナルなど）を体験的に学習していく。するとランクの無自覚がいかにかにコンフリクトを生み、エスカレートさせるか、そして反対に、ランクの自覚がいかにかにコンフリクトを鎮め、コミュニティー感覚を醸成するかが理解できるだろう。高ランク側はそのランクと特権を自覚した時、自らの力をコミュニティー全体のために使おうとするだろうし、他方社会的な低ランク側も、自らの心理的高ランクを自覚した時、そのパワーをコミュニティー全体の平和のために使おうとするだろう。

この変容のプロセス（成長）は、対立敵対するすべての立場を太極図のように抱擁するエルダーシップ（長老の心）への道である。エルダーシップは私たちが越える大きな存在につながることによって育っていく。プロセスワークはこのつながりのための方法をいくつも提供しているが、そのおかげでそこから生まれる知恵を使って葛藤をファシリテートすることが可能となる。

ランクはどこにでもあり、その存在自体が悪いわけではない。誰もが、社会的、心理的、霊的なランクやパワーを持っていることは否定しようがない。重要なことは、自らのパワーを自覚し、全体、つまり世界というコミュニティーのために意識的に使うことだ。

パワーに基づくアプローチである民主主義には限界がある。終わりのない権力闘争を引き起こしてしまうからだ。プロセスワークの「深層民主主義」は自覚に基づくアプローチであり、持続可能な平和づくりのために、独自の貢献ができるように思われる。

ランクの自覚に関する以上の簡単な導入が、3日目に予定されているミンデル夫妻のセミナーをよりよく理解するための一助となってくれば幸いです。また発表は、専門家ではない参加者がいることを充分意識し、わかりやすく、また日常生活レベルでも役に立つものとなるように最善をつくすつもりです。

1-6. プレゼンテーション・タイトル

[社会摩擦や環境問題解決の対策に人間の「音文化」(音楽や言葉)の効果]

名前：TM ホッフマン | 所属：印音楽交流会; 慶應義塾大学 | 職位：NPO 代表; 大学講師; 演奏家

ご発表は下記のどれに当てはまりますか (しるしをつけてください。複数回答可)

- 1) 対話実践に関する報告 (成功点と困難点含めて)
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況 (分断、対立、葛藤その他) の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

特定の枠を超えて全ての関心者を呼び起こすことで問題意識を広めて深めることが活動主義である。

先史時代から音楽、踊り、演劇が民衆を集会に導き、通知および緊急課題に関して責任機関と建設的な対話を提供してきた。韓国では過去千年にわたって、宮廷の歌 *kagok* カゴックと民俗物語 *pansori* パンソリ、農村打楽器団 *samul nori* サムル・ノリがそれぞれの時代の人間に自らの社会の重要課題を届けたのである。タイ国では、伝統的な民謡ジャンル *mohlam* モーラムは家庭内暴力、社会的・経済的格差、エイズなどの感染症および自然環境問題の意識を広めてきた。USA 米国では、ポピュラー音楽の歴史の中で極めて重要な Woodstock ウッドストック音楽祭 (1969 年 8 月) ではベトナム戦争や国内政治権力の乱用を含む問題上に対する有力な抗議活動を煽った。

人間の声は、市民に重要な問題に対する刺激を与えられる比類のない楽器となっている。歌 = 意味 + 音声 + 音楽、つまり関心と感動の発信媒体である。視聴覚装置のメガホン、マイク、録音と放送による伝播のために音響機器はまた一層音による効果を高めてきた。

神を賛美するか政治家と談判する、公衆を楽しませるまたは若者を教育する、製品を宣伝するか選挙で投票者に訴える — 「音は神である」を言うほど古代から音の力を認めるインド文明の言語学者と音楽学者はこうした効果を 3 千年も前より体系的・徹底的に研究してこられた。例に、2,200 年前からの総合演芸芸術百科事典 『*Natya Shastra* ナーテヤ・シャーストラ』に音と感情との相互理論「*rasa* ラサ・*bhava* バヴァ」は、音楽・言葉・舞踊・演劇および他の芸術を通じて体系的に人間の心を変える方法を開発してきた。同様に、密教の五層パラダイム「*panchabhuta* パンチャブータ」によると、五感のなかに聴覚が最も抽象的・普遍的な属性で最上に位置し、その五層全体に大きく影響を与える。

アジアの聴覚芸術を実践的で稽古し、学問として理論を追及してきたこの30年間に、対立緩和に広く適用可能な戦略が現れて来た。当発表には、可能な限り、実演教授を含めて社会変革の対話実行のための「音楽言語学的」*musico-linguistic* 技法を紹介させて頂きます。

1-10. プレゼンテーション・タイトル

[持続可能な天然および人的資源のための社会・自然調和に依拠した沿岸管理事業に対する管理計画]

名前: ドノパン・シマヌンカリト ^{*1}	所属: IGAF LC IPC	職位: 行動計画員
--------------------------------	-----------------	-----------

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 [持続的未来のために対話・変容・合意形成が必要な紛争状況]

要約・概要

インドネシアは、沿岸および海洋における（利用的）潜在性の高い豊かな国である。マングローブ林、海藻類、そしてサンゴ礁よりなる沿岸地域は、経済部門において最も可能性の高い地域の一つである。首都ジャカルタは、ジャワ島の西北に位置する巨大都市である。巨大都市であるジャカルタは、人口問題、土地制限問題、過密問題に加え、洪水、環境汚染など複雑で多様な問題を抱えている。洪水や汚染などの環境問題は非常に複雑な問題である。ジャカルタ北岸沿いに巨大貯水池という形で建設される巨大防波堤事業は、沿岸計画の一つであり、同計画は段階的にそして継続的に進行中である。巨大防波堤事業は、地下水緩衝としての真水の確保、洪水時の水流の調節、高波からの防御、新土地建設などを目的としている。巨大防波堤建設計画で提案されているものとして、津波や高波に耐え、堤防工事を促進するための特別区設定がある。

この巨大防波堤事業は、地元社会と生態系に大きな影響を与えている。社会的な影響でいうと、巨大防波堤事業は、地元住民の立ち退き問題や社会的不平等を引き起こしうる。というのは、巨大防波堤事業指定地域の住民の多くは中流・上流階級の住民である一方で、ジャカルタ沿岸地域に元から住んでいる住民の多くは漁師であるからだ。生態系への影響でいうと、巨大防波堤事業は、地元の環境汚染、そして沿岸の生態系悪化の原因となる。巨大防波堤事業を巡る問題は、防波堤建設という技術的な問題や環境問題だけに限ったものではなく、投資及び漁業問題など社会・経済的な問題も絡んでくる。現在のところ、様々な投資や漁業事業があるが、ある統計による、2012年の北ジャカルタ地域の経済における漁業関連の事業の割合は、0.10%から0.08%に減少した。本プレゼンテーションでは、巨大防波堤事業における地元の土地取り決め、同プロジェクトが経済的、生態的、社会的に現実に及ぼしている影響、今後及ぼしうる影響について述べていく。更に、現状よりの確かな沿岸管理運営方法についても提言する。

キーワード

インドネシア、巨大防波堤建設事業、エコロジー、社会・経済的沿岸管理

^{*1} ドノパン・シマヌンカリト¹、エンガル・ユリア・ワルダニ²、水産養殖技術管理¹、水産資源管理²

1-11. プレゼンテーション・タイトル

[持続可能な都市と、人々の意思決定

ポートランドのジェントリフィケーション（下層住宅地の高級化）と人種問題など]

名前：伊勢谷 二郎

所属：自営業

職位：紛争ファシリテーター

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

ポートランドは全米で、一番非営利団体が人口当たりたくさんある都市です。市民運動や、デモ等の対話シーンがどのような状況なのか。

話題が多岐に渡りますが、ご要望、必要性などを考慮して、柔軟に発表できればと考えている。分かっとうことのできる内容については以下のとおりである。

- ・ 3年ほど人種差別関連 (Race Talks, Race Dialogue) のファシリテーションをした体験のシェアを行いたい。
- ・ ポートランドは全米で、一番持続可能性のある都市計画の町として、知られており、その関連の視察の通訳や現地ガイドの仕事で見えてきたこと。
- ・ 東日本大震災 311 以降、最初の 2-3 年は、ウェブ張り付いて、空いた時間は、ずっと読んでいた。ポートランドから見た日本の状況

1-12. プレゼンテーション・タイトル

[持続可能性に向けたマルチステークホルダー型協働型ガバナンスの促進
—米国における University-based Center の事例とわが国の実践への示唆]

名前：石田 聖

所属：熊本大学

職位：特任助教

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

近年、対立的・管理主義的な環境政策及び公共政策形成とその実施に代わる新たなガバナンスの形態が生じつつある。マルチステークホルダー状況における「協働型ガバナンス」は現在発展しつつある分野であり、研究者、実務家、そして参加者らが、政府機関とともに合意形成を志向する公共的な意思決定の場において、いかにして多様な官民ステークホルダーを参加させてくかをめぐって熱心な議論が展開されている。本発表では、協働型ガバナンスを目指す取り組みとして、水資源管理や再生可能エネルギーといった持続可能性に関わる政策形成事例を通じて、戦略的にステークホルダーと取り組んでいる事例を報告する。とりわけ、米国西海岸で取り組まれている大学に拠点を置くセンターが支援する実践とその政策的影響や課題を紹介する。加えて、事例を通じて、優れた協働を生み出す（あるいは生み出すことができない）要因を検討する。これらの協働型ガバナンスの促進にとって重要な要素としては、face-to-face の対話、信頼構築、共通理解が重要となっている。本発表では、米国での協働型の政策対話の実践事例から、わが国における（将来の）協働実践に向けた示唆を得ようとするものである。

1-5. プレゼンテーション・タイトル

[変容のための紛争・変容のための病気～レデラックと東洋医学の捉え方の類似～]

名前：波多野 毅

所属：一般社団法人 TAO 塾

職位：代表理事

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

紛争を「悪」と観て、それをどう「解決」していこうかと考える思考は、西洋医学が、病気を外的要因による不幸な出来事であり、その「悪」を取り除くために、手術や医薬品などによる攻撃的な処置をする観方に似ている。

一方、東洋医学は病気は食べ物、行動、精神など人間自身の生活環境の歪みととらえ、体内の異常を元に戻そうとする自浄作用のあらわれと見る観方は、レデラックの「紛争変革」と捉え方に似ている。

レデラックの「紛争が私たちを変革する」という言葉は興味深い。彼の着想は、紛争自身が持つ「関係を変革する力」を人間関係や社会構造を互恵的で協調的なものにする力として用いることができるかを見る。そして、紛争は当事者の対応次第で破壊的な方向にも建設的な方向にも動き得るものであり、建設的な紛争は当事者間の関係だけでなく社会構造をも変革し得るとしている。紛争がなくなるのが平和ではなく、紛争が絶えず建設的なものへと変革される営みこそが大事だと強調している。平和を静的な「状態」と捉えるのではなく、動的な「行い」と捉えているのだ。

1-14. プレゼンテーション・タイトル

[東日本大震災後の対話ストラテジー—紛争変容・平和構築学の視点から]

名前 石原明子

所属 熊本大学

職位 准教授

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

1. 紛争変容・平和構築の考え方

J・P・レデラックらが提唱した紛争変容 (Conflict Transformation) の考え方では、「紛争(葛藤)がない状態が平和である」と考えるよりは、「紛争(葛藤)こそが、平和への入り口である」と考えている。紛争や葛藤や対立は、その背後に平和でない状態(J・ガルトウングのいう暴力状態など)があるからこそ(逆に言えば、そこに大切な思いなどがあるからこそ)、そこに紛争や葛藤や対立が生まれるのであり、その意味で紛争や葛藤や対立に耳を傾け、その裏にある問題を見極めて、より平和な状態に変容させていくことこそが本質であると考えます。紛争・対立・葛藤を入りにしてこそ、平和を構築できる。

2. 対話とは

紛争変容・平和構築の手段としては、様々な手段がありえるが、対話はその重要な手段とプロセスの一つである。対話とは通常、二者以上の異なった者同士の間で行われるプロセスである。異なった他者同士の間で意味の共有をもとめ、共有された(出会った)と思った瞬間に新しい世界が立ち現れ、また消えていくようなプロセスである。異なった他者同士の紛争において、意味が共有される瞬間は瞬時であっても大切なプロセスである。

3. 震災後に人間関係葛藤がどうして起こるのか

東日本大震災の被災地や被災者の間では、人間関係が葛藤や地域での対立がしばしば起こっており、そのことは、あつれきや分断といった言葉で表現されることもある。なぜ、震災後に人間関係の葛藤が起こりやすいのか。そのメカニズムとしては、いくつかの観点から説明をすることができる(石原 2012, Ishihara2012)

- (1) コミュニティの全体(全員)が傷ついたトラウマ化社会の症状(アウト・アウト・イン)としてのコンフリクトの増加
- (2) 潜在化していた価値観や世界観の違いが浮き彫りになったこと
- (3) 潜在化していた社会格差と構造的暴力の問題
- (4) 現代の法制度や補償制度が引き起こしている分断や軋轢
- (5) ベーシックニーズの基礎となる自然環境が壊されたときの人間の脆弱性

4. 東日本大震災後の葛藤の中で、そこからどのようにして、つながりあい再生していくことができるのか、そのための対話ストラテジー:多様なアプローチを考える

一つには、紛争変容・平和構築のモデルの中でも、傷ついた社会からの変容と再生に関するモデル、トラウマからの回復の戦略と、特にコミュニティの成員同士で傷つけ合いが起こってしまったような場合には修復的正義のモデルが適用できる。しかし、今回の原発事故のような構造的暴力を含む問題においては、それと同時に構造的暴力への気づきと非暴力社会運動が必要となる。

上記の戦略のためにも、対話は大きな役割を果たす。(1)一人ひとりの心のケアに資する対話、(2)コミュニティや家庭で対立したり傷つけあったりした人同士の相互理解や和解、関係変容のための対話、(3)具体的な政策決定や合意形成のための対話などである。それぞれに使われるべき手法は異なるし、また、適用する時期も異なる。また上記の戦略には、いわゆる対話以外に、ストーリーテリング(語り部)、メモライゼーション(記念と祈念)とミュージアム(記念館・祈念館)、アートによる表現、社会運動や裁判なども重要な役割を果たす。しかし、ストーリーテリング、メモライゼーションとミュージアム、アートによる表現、社会運動や裁判もある形式のコミュニケーションであり、それぞれの形での対話がそこに生まれているともいえる。

5. まとめ

今回のワークショップでは、上記の様々な目的に資する対話実践事例(プロセスワーク、ワールドカフェ、円卓会議、合意形成会議)に加え、語り部や震災復興祈念館、裁判や社会運動の取り組みの事例が発表される。東日本大震災後の対話がいかにあるべきか、あることができるのか、豊かな事例から共に未来を探っていきたいと思う。

<参考文献> 1) Akiko Ishihara, et al. (2012) "Peace building through Restorative Dialogue and Consensus Building after the TEPCO Fukushima 1st Nuclear Reactor Disaster", Eubios Journal of Asian and International Bioethics Vol. 22 (3), 2) 石原明子・岩淵泰・広水乃生(2012)「震災対応と復興にかかる紛争解決学からの提言」高橋隆雄編『将来世代学の構築』九州大学出版会、3) 石原明子(2013)「東京電力福島第一原発災害下で起こっている地域や家庭等での人間関係の分断や対立について—水俣病問題との比較と紛争解決学からの一考察」『熊本大学社会文化科学研究』11. pp.1-21

1-16. プレゼンテーション・タイトル

[様々な災害に耐えうる創齡学的社会を創造するためのダ・ヴィンチ気がつくプロジェクト
SOUL 2020 東京オリンピックの時期から 2030 年に向けてのヴィジョン]

名前：高橋 亮

所属：仙台大学体育学部健康福祉学科

職位：准教授

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

「草の根福祉」の根底の元に実践的ジェロントロジーの哲学が構築され海外に於いてもこの哲学を実践し「ヨガユニバーサルジェロントロジー共(教)育に向けての実践と展望—インドにおける高齢・障がい者福祉教育の現状と課題—」と題して報告している(高橋 2009)。その中で注目しているのは「気づきの福祉文化」である。気づきとは、見えないことを感じ取り、その根本たる根をしっかりと探し求め、よく理解して、養い育てる実践的行動である。その具体的アプローチとして東京オリンピック開催年の 2020 年に向けて、自らの先祖らの探究と共にこのコンセプトを私の生まれ育った北海道の北見を中心に実践していくことである。なぜなら自分の命があるのは両親のお陰であり、またその両親もそれぞれ両親がいて、倍々に増えていく先祖の人数を数えていくと、僅か百代も遡らないうちに、日本全人口を軽く超える人口になってしまうからである。また、世界がオリンピックを通して、東京のみならず日本中に目を向ける時にもなる。北見市に隣接する網走市の地区には、先住民であるアイヌ文化に加えて、モヨロ文化が存在しており、その土台に蝦夷地があり今日の北海道が存在していることを認識することも重要である。今日、日本中で知られる坂本龍馬氏も北海道の移住を宿願としており、妻のお龍^(りょう)夫人もアイヌ語を学んでいたと云われている。北海道について学ぶことは日本の歴史を学ぶことであり、白井暢明氏は「北海道独立論」を考えるという題目で 1989 年から現在まで雑誌「北方ジャーナル」に掲載されており、「未来を拓く北海道論」でまとめている。このなかで大切なのは、地域と世界の環境エコロジー(生態学)に対応しうる草の根福祉の人材を育成することである。したがって、単に人権や国の独立を叫ぶのではなく、どのような経済状況に於いても耐えかつ構築しうる開拓者(真の武士道の精神を持つ人)としての国民性と精神を養うことが必要であると筆者は考える。東日本大震災が起きて 3 年を迎えているが、避難生活を強いられている方は全国に 24 万 7 千人が 47 都道府県 1,152 の市町村に所在していると報告されている(復興庁 2014)。筆者は、この草の根福祉実践を 2020 年の東京オリンピックの時期を皮切りに「草の根福祉ルネッサンス」と称して、2030 年に向けての人材育成、真の歴史の探究と認識、環境整備、防災、そして共育環境整備の実現のために自らを研鑽し草の根福祉を探究しながら稽古に励む所存である(Takahashi, et al.2014)。この原稿がまとめ終わった 2014 年 11 月 27 日に、札幌市が 2026 年 (IOC は 2019 年に開催地を決定予定)の冬季五輪誘致をする表明をした報道がされた。筆者は、その瞬間にまさしく国際的な視野をもったなかでの草の根福祉のコンセプトが生かされるチャンスであると捉えた。なぜなら、これからのオリンピックは、既存の施設を有効活用し、お金をかけず、地域密着型の地域環境づくりにも寄与すること、そして札幌市だけに限らず北海道全体の協力を得ながら準備体制を整えることが期待されているからである。これからの国際社会の関心事は環境問題も含めて、これまでの人類の歴史を直視して如何にひとと自然を思いやる本来の「人間らしく生きる権利」と「平和的生存権」を核心とする社会を実現することにある(田代 2013:288-289)。北海道を考えると、まずは先住民の人々に思いを馳せなければならない。またその考え方も、日本における先住民であるアイヌ文化を表面的な観光業の視点からではなく、先祖代々の探究と共に伝承された教えやと文化を探究・継承し、そこからアイヌ式エコロジー生活を学ぶことが、草の根をしっかりと張った日本を構築することになると筆者は考えている。現在、アイヌの「伝統的生活空間(イオル)再生」構想をとおして、担い手育成事業が 3 年間 230 日間の時間をかけてのカリキュラムが実施されている。この研修は、現在アイヌの子孫に限定されているが、このような学びを幅広く取り入れることが今後の草の根福祉構想には重要な課題であるといえる。

<参考・引用文献>

Takahashi, R., Anderson, R. D., Coover, S., Kikuchi, K., Scott, A. D., & Smith, R. R. (2014): The FEMA and CERT: Training, Guidance and Managements An Analysis on Cross-Cultural Perspectives, *Odisha Journal of Social Science*.1(2), 14-28.

田代国次郎 (2013) :続・社会福祉学とは何かー「平和的生存権」実現運動ー, 本の泉社.

1-17. プレゼンテーション・タイトル

[SATOYAMA イニシアティブと宮城県浦戸諸島における復興の取り組み]

名前：鈴木 渉 | 所属：国連大学サステイナビリティ高等研究所 | 職位：シニア・コーディネーター

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

SATOYAMA イニシアティブは、2010年に日本で開催された生物多様性条約第10回締約国会議（CBD COP10）において、国連大学と環境省が共同で提案し、決議に盛り込まれたもの。COP10のホスト国である日本や日本が位置するアジア地域においては、古くから人間が自然と共生する生活様式や文化、自然利用が行われてきた。そのような自然と共生する資源利用等のあり方を、条約の実施に組み込むために提案されたのが、SATOYAMA イニシアティブである。このイニシアティブは、原生的な自然を保護することのみならず、日本の里地里山、里海にみられるような、人々が古くから持続可能な形で利用し管理してきた農地や二次林、沿岸環境など、人間活動の影響を受けて形成・維持されている二次的自然環境の保全も同様に重要であるとしている。また、こうした二次的自然環境は、経済発展や社会経済の変化にもともなう都市化、地方の急激な人口減少、高齢化などにより日本のみならず、世界の多くの地域でも危機に瀕していることがわかってきた。このような二次的自然環境は、国際的な観点から一定の理解を得ている、社会生態学的生産ランドスケープ・シースケープ（SEPLS）と表現されることが多いが、実際のランドスケープ・シースケープは地域ごとに様々である。

また、国連大学は、これまで積み上げてきた事例等を基礎に、優良事例の収集・分析を一層進める一方、これらの情報を広く共有し SATOYAMA イニシアティブの活動を支援・推進するため、環境省とともに、多様な主体の参加による国際パートナーシップ「SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ（IPSI）」を COP10 期間中に発足させ、その事務局をつとめている。IPSI は、IPSI 戦略、IPSI 行動計画、IPSI 憲章・運営ガイドラインの採択、変更などを経て、メンバー数 167 団体（2015 年 3 月現在）を擁して活発に活動を行っている。

日本三景・松島湾に位置する宮城県塩釜市浦戸諸島は、古くから牡蠣、海苔の養殖や白菜の種、水田など半漁半農の生活が営まれてきました。近年、住民の島離れ、高齢化、後継者不足による島の課題が顕在化する中、2011年に発生した東日本大震災とその地震により、大きな被害を受けた。

国連大学は、東北大学、インクジェット里帰りプロジェクト、CEPA ジャパンなどの IPSI メンバーとともに、浦戸諸島の復興に取り組んできました。浦戸諸島は、豊かな里山里海に恵まれ、特に牡蠣と海苔の養殖が主たる経済基盤となっている。このプロジェクトは、こうした里山里海の豊かさを生かし、SATOYAMA イニシアティブのコンセプトを取り入れた復興を模索してきた。

復興プロジェクトで課題となったのは、浦戸諸島を構成する有人島 4 島（5 地区）の住民の合意をどのように得るかということであった。4 島 5 地区はそれぞれ独自の文化とコミュニティーを持ち、相互の交流はあまりない。一方で、効果的な復興のためには、浦戸全体の総意を形成することが求められた。そのため、国連大学は、ダイアローグイベントとして「浦戸語り場」を 2 回開催するなど、住民の間にある漠然とした不安や期待、要望などを引き出し、それを浦戸諸島全体の総意として、離島振興法に基づき振興計画等に反映することができた。

また、この復興の様子を映像作品にまとめることにより、外部からはわかりにくい島の課題や復興の様子などを国内外に発信することにも取り組んでいる。

2-1. プレゼンテーション・タイトル

[東日本大震災後のプロセスワークを土台とした対話の実践報告]

名前：中森 真子

所属：かすかだりの会

職位：運営メンバー（名誉村民）

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

私は福島県の会津地方にある名峰・磐梯山の北部に位置する国立公園・裏磐梯というに住んでいます。2009 年末に持続可能な暮らしの実践をめざし関東より移住しました。食料やエネルギーの自給、地域コミュニティの絆づくりをはじめたばかりの 2011 年に東日本大震災が起り、私の住む場所も放射能による被害を受けました。生きる土台が崩されてしまい、どうしたらいいか途方に暮れる中、少しでも前に進むため、それぞれが何を思い、考えているかを分かち合う対話の会を 2011 年 5 月に開催しました。それから月 1 回行いましたが、毎回、放射能問題が壁となり、前向きになれないことにもどかしさや絶望を感じていたところ、葛藤解決に取り組む友人よりプロセスワークを土台とした対話開催の提案を受けました。そして、2011 年に裏磐梯の地域づくりのために 3 回、福島県内の人たち向けの対話合宿を 2 回開催しました。感じているモヤモヤして言葉にできないことを言語化したり、抑圧していた怒りや悲しみを表現して良い場合は、復興に前のめりになり、置き去りになる心の癒しとなりました。そして、自分たちの感情が整理され、起きていることを客観視することが出来たり、異なる立場の人の気持ちや状況を理解する助けになりました。

その後、対話合宿のレポートを見た飯舘村の友人から、自分の村でも対話をやりたいという相談を受け、かすかだりの会（旧・まていな対話の会）の準備がはじまりました。ファシリテーターの友人は関東在住、飯舘村の友人は北海道に避難していたため、スカイプ会議を 2012 年に入ってから定期的に行い、2012 年の 7 月に実際に会っての対話の場となりました。かすかだりの会は飯舘村の 30 代村民が中心となり、そこに関東からファシリテーター 2 名、東京、宮城、福島からのサポートメンバー 5 名ではじまりました。

プロセスワークを土台とした対話では、その場で起きる、すべてのことを受け止める場です。しかし、本当にすべてのことを受け止める「対話の器」を作るのには、とても長い時間がかかりました。「小さな声やネガティブな感情の抑圧」や「役割の固定化」により、なんども器が壊れそうにもなりました。外からの「対話ばかりやって何になる」という声に押しつぶされそうになることもありました。それを乗り越え、器がしっかりとできた後に、2014 年 3 月にオープンフォーラムという形で世代を超えた村民同士の対話を実現し一つのフェイズが終了したように思います。この 3 年間で得られたものは、自分の中から湧いてくる感情に気づき、その表現のしかたや扱い方、他者への伝え方を学んだことや、異なる立ち位置の人のことも尊重できる在り方に個々に変容したことが成果だと思います。会としての表だった成果ではありませんが、困難な中、個々が自分の人生を歩む中にそれは生きています。そして、それは、飯舘村の参加者のみならず、運営サポートをさせてもらっている私にとっても 3.11 以降の世界を歩むうえで大きな体験でした。また、そこには役割を越え、存在そのものとして福島に関わってくれたファシリテーターの二人の力がとても大きかったと思います。ボランティアで関わり続けてくれているファシリテーターの二人にこの場をお借りして、感謝の気持ちを表したいと思います。

しかし、この会がめざす、1 人一人の心の復興とコミュニティの再生には、まだまだ遠い道のりです。そこに対して、どのように取り組んでいくべきかは、ただいま模索中です。

2-2. プレゼンテーション・タイトル

[かすかだりの会 (旧までの対話の会) ・ 3年間の振り返りから見える課題と問題]

名前: 酒井 政秋

所属: かすかだりの会

職位: 会長

ご発表は下記のどれに当てはまりますか (しるしをつけてください。複数回答可)

- 1) 対話実践に関する報告 (成功点と困難点含めて)
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況 (分断、対立、葛藤その他) の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

1. 自己紹介

飯館村で高校までを育ち東京に上京するも肌に合わず南相馬で婦人服製造業の主任を経験し、長男と言う事もあり飯館村に戻り友人が経営する婦人服製造工場に勤めました。これから村とどう会社として個人としていかを模索している最中、2011/3/11、東日本大震災が起きました。夢は破れ、飯館村での人生は碎かれました。これから、生活再建と飯館村の心のつながりをどうしていくかを考える。2012年7月からかすかだりの会・会長。現在、福島県伊達市に避難中。

2. かすかだりの会 (旧までの対話の会) について

「かすかだりの会」は、2011年3月の東京電力福島第一原発事故の影響により、全村避難となった飯館村村民ひとりひとりの心の復興をサポートし、その積み重ねをコミュニティ再生へとつなげるための対話の場です。

2012年から開催しているこの会では、1年間かけて、参加者がネガティブな感情 (怒り、怖れ、無力感、絶望など) も安心して表現でき、対立・葛藤が起きても受容し支えられる、「すべてを歓迎する場」の器を、専門のファシリテーターと共につくり上げてきました。

福島において復興は急務である一方で、「未来」に急ぐあまり、一人ひとりの「今」や「小さな声」を置き去りにしないことを大事にしています。一人ひとりの今を見つめ、心の深いレベルで共感する時、個々の多様性を認めながらもゆるぎない信頼関係が築かれていき、村民一人一人の本来持っている力を取り戻す事。その気づきが真のコミュニティ再生へとつながっていくことを願い活動しています。

また、「かすかだりの会」は意見や立場の異なる人、対立する人とも深いレベルで共感することをみつけ対話ができることを目指しています。この世界をつながりのある皆が望む方向に進めていくには、意見や立場の違いを超えてお互いの小さな声や本当の想いを聞く必要があり、個人個人が見ているもの、感じている自然に起こってきていることの中に大切な知恵があるとわたし達は考えています。

3. 個人として対話を通して向きあってきたこと

わたしは大地震・原発事故の当事者としてなかなかそのことを受け入れることが出来ずに約1年間苦しみました。組織・企業に対しての怒りと専門家に対して強い憤りと不信感によって、生きる希望が持たず、それでも時間だけが過ぎていく事に対しての焦りや将来への不安で押しつぶされそうな時、あるイベントにて「対話」と出合いました。そして、真剣に私の声に耳を傾け、一緒に考えてくれたことになんだか心が解きほぐされるような感覚がありました。自分に心の余裕が少しできた時、必然的に人々と繋がる事が出来ました。そして、飯館村の若手・飯館村に想いのある村外の有志の方々と出会うことができたこと。これらの人々との出会いはわたしにとってかけがえのない心の財産となりました。この場を借りて深く心から感謝いたします。

対話を通して表立った問題は解決したかという正直な解決などしていませんが、少なくとも対話があったことで自分の中での心の変容や今の生活に対話が影響していると考えます。例えば、紛糾してしまう場において相手に対して敬意を払う事によってその場の空気感が変わっていき、相手もまた変容していき場の流れがスムーズに行く事であったりと生活の中で自然と対話ができるようになってきたことは3年間対話を通して得られた成果でもあると感じています。これからも自分と向き合いながら、1歩1歩心ある道を歩んでいきたいと思えます。

また、会としても「第1章」が終わり、新たなフェーズへと変わる時だと感じており、これから様々なプロジェクトを通してその中に土台となった「対話」を盛り込んで大切に会を運営していきたいと思っています。

2-5. プレゼンテーション・タイトル

[震災復興祈念館・エンターテイメントを通じてうまれる対話
—新しい形で震災後の福島の学びを広く伝えるために]

名前：佐藤健太

所属：NPO 法人 ふくしま新文化創造委員会

職位：代表理事

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

この発表では、私たちが行っている活動を通じてどのような対話が福島内外に生まれることを期待し、また生まれてきているのかについてお話いたします。とくに、私が代表理事をつとめる「NPO 法人 ふくしま新文化創造委員会」で行っている活動を中心に、紹介させていただきます。震災復興祈念館・エンターテイメント・対話・伝えるなどをキーワードに考えていきます。

また、今「NPO 法人 ふくしま新文化創造委員会」として行っている活動以外にも、私がこれまでかかわってきた福島での、あるいは、福島からの対話とコミュニケーションの活動のいくつかについてお話いたします。

1. ふくしま新文化創造委員会とは？

ビジョンと目標とすること、設立時期、メンバーや組織、これまでの歴史と活動内容を紹介します。エンターテインメントを中心としたパフォーマンスにより新たな文化をつくっていき、震災後の福島の学びを広く伝えてゆく活動をしています。

2. 活動内容とビジョン、そこから生まれる対話への期待、成果と困難点

- ・ロメオ・パラディッツ
- ・震災復興祈念館
- ・その他

3. これらの活動の中に取り入れている対話

私たちは活動の中で、プランニングや活動それ自体として、多くの対話技法を取り入れています。どのような対話手法を取り入れ、どのような成果が上がっているかを話します。

4. (ふくしま新文化創造委員会以外の) ふくしまでの・ふくしまからの対話やコミュニケーション

ここでは、過去に行ってきたいくつかの活動（ふくしま会議など）を少し紹介します。

2-3. プレゼンテーション・タイトル

[郡山で取り組んできた対話の場づくりの成果と課題]

名前：三保谷 泰輔

所属：郡山対話の会

職位

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）

2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告

3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言

4) その他 []

要約・概要

1. どんないろんなことをしてきたか これまでの経緯

震災後の2012年7月に、価値観、役割、立場の異なる多様な人たちが集い、オープンに話し合える対話の場を目指してスタート。最初は、限られた参加者だけのクローズドな対話の場から始まる。対話の場の存在を知り、参加したいという他の地域の方からの要望に応える形で、郡山限定から、福島県限定、関心があれば県外からも参加 OK と枠を拡げ、回を重ねてきた。2か月に一回のペースで、これまで14回の対話の場を実施。

2. 成功点、良かったこと

対話の場の名称を、「ひとりひとりの小さな声に耳を傾けるダイアログ」とし、自分自身であったり、他者の内面の深いところにある、聴かれていない小さな声に深く耳を傾けることで、気づいていなかった何かに気づき、小さな変化が起こる瞬間を見出す機会を何度か体験できたこと。

回を重ねる中で、運営メンバー同士が、小さな声に耳を傾け、オープンに対話することで、変化と成長を重ねながら、これまで継続して場を作り続けてこれたこと。

福島県外からの参加者が、福島県在住者の生の声を聴き、福島県在住者が県外の方の生の声を聴き、多様な立場の参加者が集うことで、互いにネットやメディアの「情報」では分からない、生の声から学びや気づきを得られること。

3. 困難点、課題

これまで誰も経験したことのない、震災後の福島の現状に対して、燃え尽きてしまったり、メンバー間の葛藤や対立で、会の継続が困難になることも起こり得る。そんな中を、自分たちの内面で起こっていることに自覚的でありながら、社会の現状に寄り添い、オープンに心を開き続け、バランスをとっていくことの難しさを感じている

2-4. プレゼンテーション・タイトル

[対話で育てる未来の種]

名前：菅波 香織、
霜村 真光、藤城 光

所属：未来会議

職位：事務局長(菅波香織)

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

原発事故後の福島県いわき市で、私はいろいろな悲しい場面に出会いました。放射能を心配する人と、復興に向かいたい人の対立。警戒区域から避難してこられた方と、いわき市民の感情的な対立。いわゆる分断と呼ばれるような場面をいくつも目にし、解決策も見えないまま、日常が過ぎていきました。

ある日、ワールドカフェ形式のワークショップで、原発事故後の放射能問題に向き合う対話の場に参加しました。ワールドカフェとは、カフェの様な気軽な雰囲気の中、自由に話をする形式のワークショップです。

話し合いのルールは、2つ。相手の意見が自分と違ってても、議論せず「そういう考え方もあるよね」と答えることと、本音で話すこと。

さまざまな立場の方が参加されていましたが、対立や批判が生じることなく、対話が終わりました。いま、いわきで起きている問題を解決するために、私に何ができるだろう。私の頭の中に、整理しきれない、未来に目を向けた、沢山の考えが湧いてきました。私は、このような対話の場こそ、いまのいわきに必要なのではないかと感じました。そして、私以外にもそう感じた何人かが、いわきで、未来会議を、少なくとも30年以上は継続して開催しようと、立ち上がりました。

未来会議という対話の場を通してわたしたちが実現したいことは、3つです。

1つが、気持ちの分断の解消です。

2つめが、それぞれが抱え、感じている問題の共有・可視化と未来に向けての対話です。

3つめが、未来に向けての実行です。

一つ目は、気持ちの分断の解消。対立や批判でなく、いろいろな価値観があること、一人一人が違うことを認めることが大切だと感じます。そして、それを前提に、共に生きるためにどうしたらいいか、参加者みんなで考えていきます。2つ目については、解決したい問題を共有・可視化し、未来のために、自分たちに出来ることは何かを対話することです。多地域、多ジャンル、多世代の方が参加することで、ネットワーク形成のきっかけともなっています。三つ目は、未来会議では、話し合うだけで終わることなく、一人一人が、未来のためにできることを考え、小さな一歩からでも実行に移していこうとしています。そして、人と人が繋がる場でもある未来会議では、未来をつくる具体的なアクションをめざし、その後のフォローアップまでできる体制を整えているところです。

未来会議には、いわき在住の方、いわきに避難して来られた方はもちろん、震災後の問題に関心のある方は、どなたでも参加できます。

今後30年という長期間、未来会議は、様々な場所で継続し続け、震災後の社会が変わっていく様子を記録していきます。

<http://miraikaigi.org/>

2-8. プレゼンテーション・タイトル

[**【活動報告】福島の子どもたちとの長期キャンプにおけるプロセスワーク的アプローチ**]

名前：武田 美亜

所属：Shanti Daya

職位：freelance；ファシリテーター；
キャリアカウンセラー

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 [活動報告]

要約・概要

三鷹子どもの楽校は任意の市民団体で、2011年から3年間に渡り、福島の子どもたちと2週間に渡る長期保養キャンプを行いました。完全無料の、丁寧な生活とコミュニケーション、関係構築に拘った場づくりです。

子どもたちやキャンプリーダーである学生たちとの接し方に対し、プロセスワーク的な視点やアプローチを導入しました。今回はそのケースの紹介とアプローチの効果などをご報告します。

2つのケースを報告したいと思っています。

ケース1) 身体感覚チャンネルとムーブメント（動的）チャンネルからのアプローチ

子どもたちとの関係構築において、身体感覚や動きを重視したコミュニケーションスタイルを導入しました。また、身体感覚に意識（気づき）がいくようなコミュニケーション（フレーミング）技法を使うことで、子どもたちが自分の身体との関係性が変容しました。また、ヘルニアによる激痛で苦しんだ中学生とのワークのストーリーもシェアしたいと思います。

ケース2) ランク概念を活かしたアプローチ

それぞれの立場が持つ「ランク（特権）概念」についての考え方をもとに、リーダーや子どもたちのエンパワーメントを行いました。こちらが「提供者」、子どもたちや福島の人たちが「提供される者」として関係性を位置づけるのではなく、それぞれがその場にコミットして自分のランクを提供していくことで、よりフラットな関係構築につなげました。

2-6. プレゼンテーション・タイトル

[震災における語り部の役割と自己受容]

名前：高村 美春

所属：原発震災を語り継ぐ会

職位：主宰

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

「小さな社会は自分の中にあり、その社会と対峙するための技法が語り部ではないか」

東日本大震災及び福島第一原子力発電所爆発及び避難という体験から語り部として活動してきました。語り部は自分からなろうと動いたわけではありません。はじめは請われて話始めたことがキッカケでした。これまで語り部というイメージは、昔の物語を口伝で伝えるというものがありましたが、実はこの役割は社会的位置ではなく本来家庭の中で年寄がその役割にありました。

しかし現代社会においては核家族となり、その役割が外の社会へと担ったと考えられます。今回の震災でも津波被害を口伝で伝えられてきた方々は、その口伝のおかげで命拾いをしたと揃えて言います。そして、こうした震災は繰り返される悲劇であり未来へのメッセージとして残さなければいけないと認識されるようになりました。

実際には沖縄や広島、長崎、水俣にて多くの犠牲となられた方たちの言葉が心に響き「平和」へと誘われています。

請われて始めた語り部ですが、何度か話を繰り返すなか不思議なことが起こり始めました。まず凝り固まった「恨み」や「怒り」が溶け始めたのです。今なお苦しみが続く中「許す」という境地に立つようになったのです。震災すぐ後にトラウマに襲われました。避難により子供とバラバラになり、少しでも子供と離れると不安になり涙を流すことがたびたびあり、また国や東電に対しても憤怒で言葉にならなかったほどでした。が、現在はそういったものすべてに対して受容している自分がいることに気が付いたのです。それは語り部として話すたびに目の前の人へ語り掛けているだけでなく、自分自身へ問いかけていたのです。社会とは自分以外に人がいることで社会となります。私は自分の中に様々な「私」がいることに気が付きました。子供と離れて苦しい私、加害者へ恨みつらみを持つ私、そして私とその「私」に聞きます。何が辛いのだと・・・語り部は一つ間違えると不幸のアピールにしかありません。そうではないのです。その被害や不幸から学んだことを伝えることが第一にあるのです。悲しみ苦しみのスパイラルから脱するために語るのだと思います。そしてそれはまた自分自身への受容として生かされるのだと感じました。語り部とは口伝で事実を伝えるだけでなく、苦しみの中にある人が答えを出すためのツールの一つにならないだろうかと考えています。

2-7. プレゼンテーション・タイトル

[なぜ私が告訴をしたのか —持続可能な未来を求めて—]

名前：武藤類子

所属：福島原発告訴団

職位：団長

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

私は、福島県に住みながら、原発やその危険性について、何も知らず考えずに生きてきた一人の市民でした。そんな私が原発のことでショックを受けたのは、旧ソ連のチェルノブイリ原発事故が起こったときでした。そのときにはじめて原発事故の恐ろしさについて知り、原発とはほんとうに怖いものだと思い、その後、原発に反対する運動に関わるようになりました。

それから 25 年、私の暮らす福島で原発事故が起こりました。細々ながらも止めようと活動してきたその原発が、しかも自分が住んでいた福島の原発が事故を起こしたという現実を、どうとらえてよいかわかりませんでした。避難のことや生活のことも含めて、どうしてよいかわからない日が続きました。

告訴を考えるに至ったのは 2011 年の末のことです。原発事故が起こってしまったこの現実を、まだ受けとめきれずにいましたが、でも同時に、さすがにもう原発はやめようという方向に社会が変わるのではないかと、最後の希望のようなものをつないでいました。でも、その時点で既に再稼働の計画は話し始められ、県や政府の、子どもたちの健康を第一に考えない対応に再度、打ちのめされる気持ちになりました。どうしてこのようなことになるのだろう。そう思って考えたときに、この事故の責任がきちんと問われていないことが、根底にあるのではないかと思うようになりました。

そして仲間たちと告訴団を結成し、団長を引き受けることにもなりましたが、自分の中では、告訴をするということを、自分自身がどのように受け止めていいかわからず、もやもやと悩み続けていました。

人の罪を問うことは、私自身の生き方を問うことでもありました。原発事故は、この社会全体のあり方の結果でもあり、また、原発事故を止められなかった私自身のあり方の結果でもあります。私は、この原発事故を防げなかった自分に、責任と痛みを感じています。にもかかわらず、そんな私が、誰かを訴えてその罪を問うということについて、どのように考えたらよいのだろうととても悩みました。それでも、原発を造ってきた世代の責任として、若者や次の世代の子どもたちに悲しい未来をもたらさないために、社会の制度の中で事故を起こした者の責任を問い、事故の真実を明らかにするために、誰かを訴えるというこの痛みを抱えながら、私は告訴をすること受け入れました。

告訴や刑事裁判と、赦しの関係について、考えることがあります。告訴や刑事裁判は、社会や人同士を対立させ分断するものなのでしょうか。アフリカのルワンダ人の方に、和解についての話を聞く機会がありました。内戦で住民同士が敵味方に別れ、命を奪いあうに至ったルワンダで、戦後、どのように和解や赦しがありえたのか。私が出会った方は、その内戦で家族を複数殺された人でした。でも、その人はわたしの前で「自分の家族を殺した人を赦す」と言い切るのです。ルワンダでは内戦後に刑事裁判を行い、加害者の責任が追及された後で、地域社会での赦しと和解への営みが行われたそうです。裁判を開き、その上で赦す。裁判から始まる対話もあるのかもしれない。そんなことをふと思いました。

事故により分断され、引き裂かれた私たちが再びつながりあうこと、傷つき、絶望の中にある被害者が力と尊厳を取り戻すこと、チェルノブイリなど過去の原発事故の被害者や私たちが経験した悲しみを、二度と子どもたち、若者たちに経験させないために、ひとりひとりが変わることで世界を変えていく。決してバラバラにされず、つながりあうことを力とし、怯むことなく歩んでいきたい、と思っています。